

テント日誌 3月31日(木)版

## コロナ禍は終わったわけではないのだが

3月31日(木) 三上治

ロシアのウクライナ侵攻ですっかり影に追いやられた感もするコロナ感染(コロナ禍)ではあるが、感染は依然として続いている。感染の波として第7波も予想されている。コロナ感染の拡大は僕らの日常生活をいろんな面で変えてきたが、その一つに人とひとの直接的な接触の禁止、あるいは制限がある。僕は過日、病院に入院したときに面接禁止としてこの事態に直面した。この人との接触の禁止、制限は相当きついことであるが、また、ポストコロナ社会でも長く続くのだろうと、想像した。この事態は僕に大事な楽しみを奪っている。その一つは孫たちと会うことが減っていることだ。これは多くの高齢者が遭遇していることだと思う。息子に電話すれば、そのうちに行くよというのだけれど、会う契機は減り、仕方がないかという諦めの気分になっている。

その孫たちの様子をネットで送ってくれるのだが、その中に長年飼っていた猫が死に、嘆き悲しむ孫の姿があった。死にさいしては家族みんなで見送ったというコメントがついていたが、少学一年生の孫のひと際悲しそうな姿が、脳裏を離れなかった。命ということに、あるいは命あるものとの別れということに初めて直面して、たただ嘆き悲しんでいたのであろうとおもう。ここからは僕の独り勝手な想像であるが、この一つの生命の終わりに出会った悲しみを、僕らが今目の前で見ている戦火(戦争)の中の死というところまで広げて感ずることができるのだろうかと思った。これは僕の密かな期待でもあるのだが、いつの日か彼は生命についての悲しみと慈しみを広げて感受できるようになって欲しい。

人への思いやりが人との関係において最も大事なことだが、それは理不尽な死に直面せざるを得ない命に対する悲しみや慈しみから出てくるものだからだ。

彼がかわいがっていた猫の死から何事かを感じさせられたのだとすれば、それは理不尽な死に直面する人たちへの思いになって欲しい、そう願っている。親バカならぬ孫バカというのかもしれないが、それは僕の願いとしてある。

ロシアのウクライナ侵攻を見て、僕がなりよりも感じ、想像したのは理不尽な死に直面する人たちのことだ。双方の兵士や市民のすべてである。その意味でこの戦争を仕掛けたプーチンや彼を取り巻くロシアの権力者たちに言いようのない怒りを感じる。どのような理由であれ、戦争(侵略)を現実的に行なった人に怒りは向けられるし、それをとがめられるのは何よりも前提的なことだ。そのうえで僕らはこの戦争をどうして止められるかを考えるのだが、そこで僕は傍観者というか、そういう位置にあることを知らされる。

これは世界の構造からやってくることなのだが、そこで僕らはある種の疚しさを感じる。この戦争への批判、あるいは肯定としての自分の行為に疚しさや無力感を持たされる。これは善意や悪意と言ったことの無意味さを教えるのだけれど、ここから細い道を通ってしか戦争にはかかわれないことを知らされる。僕はかつての反戦闘争な中でこのことを学んだ。

今回のロシアのウクライナ侵攻(侵略)に接して自分が何をなせるのか、何をできるのかを考えた。考えてきた。この戦争を止められるのはウクライナの人たちの抵抗というか、反撃が一つだし、ロシアの内部から戦争をやめさせる動きである。これは侵攻を一カ月経た今、進行している現実だと推察しうる。ウクライナの首都を制圧し、傀儡政権を樹立するとういのがプーチンのシナリオだったのだろうが、これは頓挫したように見える。もちろん、それは希望的観測であることを免れないにしても。戦術的転換かもしれないからである。

ただ、ウクライナの人たちの抵抗はプーチンには予想外のことだったろうが、これは彼の他の国家というか、他の民族の人たちに対する認識を露呈させたことであり、彼のロシア帝国の復活の中身を示したことである。彼にとって他の国家や民族は支配される存在であり、安易な支配から免れようとする存在であることがわからなかったのである。いや、そういう認識を拒否してきたというべきか。

他方で、ロシア国内での人々に動きはどのようなのだろうか。情報が遮断されているから、わからないであるが、一定の形でのプーチン支持と批判とが広がっているように憶測できる。今度の戦争の動機の一つとして、プーチンの統治の危機があり、それをそらすために戦争を選んだということに僕は直観した。これはプーチンが自己の統治基盤を強めるためであり、これは支持基盤を失う両刃の刃というところをもつのだが、両面を深めているように思う。いずれにウクライナの人たちの抵抗とロシア内部の人たちのプーチン拒否の動きがこの戦争の解決に導くだろうと、推察してきたが、概ねその通りに事態は進行しているように思う。

進行も一カ月を経て、停戦の動きは活発である。これが、どんな形で進むかはわからないが、基本的なことは、停戦はロシアの攻撃の停止であり、撤退でありウクライナの側にヘゲモニーがあつて当然のことであるということだ。

ロシア側の停戦条件は無理というか、理屈に合わないものが多いと見受けられる。自分が戦争を仕掛けておいて、相手に非軍事化を要求するというのはどういう神経かと思う。これは降伏の要求であり、ウクライナ側が蹴るのはあたりまえである。

当事者でない僕らがなかなか戦争に関われないように、停戦の動きもそうなのであるが、これについては僕はウクライナ側の動きを支持するとか言えないのだと思う。

ロシアのウクライナ侵攻について多くの見方が流布されているように、多くの提案がなされている。すべてに目をとしたわけではないが、停戦の提言が多くみられる。その中でも抵抗を解除して無防備都市宣言をすべきだというのもみられた。善意の提言かもしれないが、これは降伏の勧告と同じでヒドイものだというほかない。地獄への道は善意で敷き詰められているという事の典型のようなものだ。

こうした多くの提言に僕が疑問を抱くのは戦争への関りが困難で、細い道を介してしか不可能であるという自覚が見られないことだ。この戦争に対する自己の立ち位置に自覚的でないと、安易な提言になってしまう。

ロシアのウクライナ侵攻(侵略)については大義なき戦争であると言われる。だからではないが、ロシアはこれを戦争といわずに特別作戦と称している。彼らもこれが大義なき戦争であることはわかっているのだと推測できる。僕はかつて日本が中国大陸に侵攻(侵略)にしたことを事変と読んでごまかしたことを想起する。これは当時、侵略戦争に反対する動きが出てきて、パリ反戦条約ができたことから戦争を避けるためだった。事変と言ってごまかしたのだ。

この方法をファシズム(ナチズム)は密かに導入していく。戦争の違法化の動きの中で抜け道を作った。今、戦争が世界的に違法化される状況の中で、プーチンは特別作戦ということでそれを真似ている。この戦争は大義なきと言われるだけ、ある意味で分かりにくい戦争にしている。

これについては、僕はプーチンの国家戦略を探索する形で追求してみた。これについては前号の日誌でも明らかにしたので詳しく触れないが。プーチンの国家戦略にその秘密はあると思う。専制的な、力による支配、帝国主義的な復活(ロシア帝国の復活)などとしてそれは指摘できる。

ただ、この探索において戦争の根拠についての十全な理解(認識)が得られたのかと言えば、そうではなく、多くの自問が残った。これには僕らが戦争に関係するのはどのようにして可能かという自問でもあった。ということは戦争をなくしたいという意味はどのように実現していくのかということでもあるが、その問いが残ったということだ。

このロシアのウクライナ侵攻に反対し、同時に戦争をやめさせる道はどのようにあるかということだ。このウクライナ侵攻に対してはウクライナの人たちの抵抗によるロシア軍の撤退(排撃)と、ロシアの人々の反乱(国家権力)であるが、僕らはこれに対して間接的にしか関われない。そこでできるのは闘う人々の行動を支援することができることがせいぜいのところだ。

だが、戦争をやめること、戦争をなくさせることは僕らに関わる課題である。それは僕らが構成している国家に戦争をさせないということなのだが、そのために、僕らは何をなしえるのか、なにをすべきなのか。それはこのロシアのウクライナ侵攻を通して戦争とはなにか、それはなぜ起こるのかを深く認識することである。

そして、反戦(非戦)の運動とはこの認識を広める、共通の認識にすることだ。戦争についての明確な認識なしに、それを廃絶する構想も出来ようもない。人はいうかもしれない、それは単純なことだと。単純なことだが、これが極めて困難なことだ。僕は戦争の問題こそ、戦後最大の思想の問題だとし、それを考え続けてきた。だが、いつもこの営みは【戦い済んで日は暮れて】という思いをもたらす類で、道遠しという思いを感じてきた。だから、共通の認識を求めて大いに議論をしたいと思う。ウクライナ侵攻に反対する僕らの運動がこうした議論を深めてくれることを僕は期待している。